

## ハーディとメソディズム

—“You dissent from Church, and I dissent from State.”—<sup>(1)</sup>

栗 野 修 司

### Abstract

Thomas Hardy's "The Distracted Preacher" is based on a narrative he heard and recorded about a smuggling village on a Dorset coast at some point in the 1830's. Written during the years when Hardy was preparing for and writing *A Laodicean* (1881), a religiously polemical novel with a dissenting (Baptist) heroine, "The Distracted Preacher" (first appeared in 1879 in *Harper's Weekly*) is far from religious or polemical. It is a love story between Mr. Stockdale, a Methodist preacher (a religious dissenter), and a beautiful young widow, Lizzy Newberry, who runs a smuggling business with other villagers (a legitimate dissenter). In writing about a Methodist preacher who is also enticed into dissenting activities from the King's laws, Hardy leaves hardly a trace of irony. We are given just the facts, with a realism that seems to work as an antidote to the moral ambiguity of the titular hero's actions. Could it be that Hardy intended his readers to smirk at Stockdale's confusion (or distraction) between the power of love and the power of the Bible?

Methodism places importance on conversion, especially sudden and violent conversion. For Hardy, conversion is not such a miraculous, unscientific event, but a slower and painstaking process of character development, a lifelong experience like the maturing of a character and increasing knowledge. For Clym Yeobright (in *The Return of the*

*Native*), conversion is a life-long experience; tamed by harsh reality, including the deaths of his wife and mother and the loss of his own eyesight, he finally finds his vocation—as an itinerant Methodist preacher. To the contrary, Alec d'Urberville (in *Tess*) claims to have been miraculously converted to become a Methodist preacher soon after his mother's death. But as soon as he sees Tess again, he gives up on being a preacher and turns into the same obsessed seducer. And in *Jude* Sue Bridehead becomes a religious fanatic just after the violent deaths of her three children. In a state of tormenting guilt and remorse, her personality is distorted, and she blindly seeks a self-inflicted punishment. Hardy places emphasis on the differences between the two types of conversion. His employment of conversion experiences in his works leads us to think that the world is no longer a theater for a miraculous, religious conversion.

The phrase, “Where novel-reading comes in, Bible-reading goes out,” expressly shows that literature and religion are mutually exclusive for some churches (religious denominations) and it is the case with Methodists and Evangelicals. That can explain why the Dissenters themselves produced few novelists, despite their numerical importance in Victorian England and their strong influence upon society and their achievements in social reforms. Evangelicals disliked novels, which for them were one of the most universal as well as the most pernicious sources of corruption and the Dissenters' rejection of imagination derived from their theological belief that the imagination is to be devoted wholly to God. But for Hardy, imagination is not for God, but it is his own poetic muse. He has described in many works the working of imagination as “retrocognition,” a psychic ability to “see” an event that has happened in the past, whether it is concerning the seer or of an unfamiliar lineage in a past occurrence. Hardy's Wessex is a place where solid materials situated in the landscape

or within the home are charged with memories that activate imagination; and a limited number of those “gifted” people can “bear / The visioning powers of souls [and] dare / To pierce the material screen” (“The House of Silence”). His novels and poems which feature retrocognition include *The Return of the Native*, *Jude*, “The Roman Road,” “Beyond the Last Lamp,” “Old Furniture,” “The Shadow on the Stone,” and “House of Hospitalities.” All these poems, Hardy’s “poetry of place,” include within their titles “a catalyst” that connects the past and the present, activating imagination — a road, a lamp, a stone, furniture, and a house. With the help of imagination, the protagonists and speakers that inhabit Hardy’s works can pass through the realms of space and time to find a poetic landscape in a prosaic, everyday life.

The last page of “The Distracted Preacher” describes Lizzy’s conversion. It has taken place slowly and therefore it is a good conversion— “‘I own that we were wrong,’ said she. ‘But I have suffered for it. I am very poor now, and my mother has been dead these twelve months .... But won’t you come in, Mr. Stockdale?’” (89) “Good” conversion takes place slowly, but in a sure way. Lizzy’s conversion is motivated by her mother’s death, as other conversion experiences are; the difference is that for Lizzy conversion takes place together with reformation. “The Distracted Preacher” is entertaining and humorous, and is worth reading for those who are interested in Thomas Hardy’s attitude to Methodism, which has never been a serious consideration for him.

イギリスの19世紀半ばは小説の時代であると同時に、宗教（ここではもちろんキリスト教）の時代でもあった。小説と宗教はそれぞれ包摂し合い、排除し合うという、微妙かつ複雑な関係にあった。この時代の小説家たちはそれぞれ宗教に対して異なった距離を置いた。宗教に対する姿勢が様々なので、Robert Lee Wolfeは *Gains and Losses* の中で、この時代の作家をプリズム

の無数の色に例えて分類している。興味深いのは、特定の宗派に作家が偏在していることだろうか。彼によると、メソディストの作家はわずかひとり(327)、エヴァンジェリカルの作家は複数いるが、その作品の内容は「カルヴィン主義が個人の生活にインパクトを与えていることを『ぼんやりと(faint)』描いているだけで」、現代の読者が読むにたえるレベルではないという(249)。メソディストもエヴァンジェリカルも信徒の数で他を圧倒し<sup>(2)</sup>、何よりも社会改革運動に積極的で、当時の社会に対する影響力も大きかった。そういう教会の信徒がなぜ優れた小説の書き手ではなかったのかというその原因を検証するだけでも意味はある。一方でメソディストやエヴァンジェリカルを登場人物として描いた作品は少なくない。トマス・ハーディもメソディストを登場人物として作品中で描きながら、メソディズムそのものを深刻な問題として扱うことはなかった。それはなぜなのか、ということについて、小説と詩から例を引きながら、考えてみたい<sup>(3)</sup>。

## I

蔑称がやがて通称になった例がいくつもあって、代表的な例が文化様式を表すゴシックとロマネスクである。低<sup>エヴァンジェリカル</sup>教会とメソディストもその例に含まれる。Methodistはmethodical「秩序立った、整然とした、組織的な(systematic); 規律正しい、きちょうめんな(orderly); 入念な」(研究社『新英和大辞典』)の派生形である。“The Distracted Preacher”からこの単語を皮肉に使った例を引く――

There was never such a tremendous sniffing known as that which took place in Nether-Mynton parish and its vicinity this day. All was done *methodically*, and mostly on hands and knees. (71; emphasis added)

この中短編は1830年代に、ドーセット南岸でジンやブランデーの密貿易を生

業としていた人たちにスポットライトを当てている。この小品の舞台になっているネザー・ミントン村へしばしば密貿易取締官が訪れて探索をする。引用はラティマーという名の取締官とその手下たちが村中を捜査して、隠されている酒樽を探す場面である。このラティマーには「王様の名において助力を要求する」(73)とお上意識が骨の髄までしみこんでいる。王様の密貿易取締官とその手下たちの行動を「メソディストさながら」と形容するところにおかしみがある。ハーディの全作品中“methodically”の使用はわずか6例にすぎない(*Desperate Remedies* 2, *Under the Greenwood Tree* 1, *Hand of Ethelberta* 1, “Distracted Preacher” 1, *Tess* 1,) ことを考えると、この中短編のこの文脈でこの単語を使ったのは意図的ではないかと思われる。テキストには搜索場所を図案化して、視覚に訴える工夫までなされている<sup>(4)</sup>。それがこの単語が意図を持って選ばれているのではないかという考えを補強するだけでなく、語り手自身も“methodically”に語っているということがユーモラスに暗示される。

このテキストには「王様 (the king, a king)」という単語が頻出するが、王様を巡る言説は我々の読解力を試す。ラティマーは密貿易を先祖代々稼業としている村人たちが権力やお上の存在をほとんど問題にしていないことに気がつかない。「私たちには何者でもない王様が、手下を送って私たちの所有物をくすねようするなら、それを盗み返す権利が私たちにはある」(81)とか、「私はお母さんのことをよく知っているけど、王様なんか見たこともない」(84)など、ヒロイン、リジー・スモールベリーの言葉はそういう意識を表している。彼女はヴィクトリア朝のコンペションから逸脱した活発で自立的な女性である。リジーはしばしば祖父母の代から営んでいる密貿易を正当化するために「王様」を持ち出す。そしてストックデールに向かって、「あなたは国教会に反対しているし、わたしはお国に反対しているの (“You dissent from Church, and I dissent from State.”)」(86)と付け加える。リジーを愛しているメソディストの牧師はそのたびに「困惑」する。なぜなら、メソディストは非国教徒であっても、政治的には保守だったので彼女の指摘は当たらないから。メソディストの名前の由来は、『一般祈禱書 (*The Book of Common*

*Prayer*)』で規定されている聖務日課を几帳面に実行したからである。この事実をとっても、メソディストが国教会と必ずしも相容れない存在ではなかったことが分かる。メソディストは確かに国教会から離反したが、批判したわけではない。John Wesley は、英国国教会は「世界で一番聖書に基づいた国民の教会」だと信じていたという (Tucker 209)。19世紀のイギリス宗教地図中のメソディストの位置を正確に把握していないと、リジーの言葉の不正確なことや、それを聞いてストックデールが困惑する理由まで理解できないのだ。

メソディストと同じような曖昧な部分が世俗の集団にも存在したことをハーディは「困惑する牧師」で描き出す。例えば、シェルブールから密輸された酒の樽の運び役を務める数十人 (two or three dozens) の若者のうち、9人はメソディストのチャペル (ストックデールのチャペル) へ通い、それ以外はどちらかと言えば国教会派だ、と新米の牧師に説明するリジーは、高教会の牧師さんは密輸酒を買ってくれているお客さんなので、つれなくできないのよ (64) とも説明する。彼女の言葉は村人たちの宗教観を示すと同時に、国教会の牧師 (とメソディスト派の牧師の節制についての違い) をもはっきり描いている。何のことはない、国教徒と非国教徒、正当と不当、合法と非合法という二項対立をこの密輸を生業とする村人たちは無効化してしまっているのである。村人たち自身も「朝は国教会の教会へ行き、午後やお茶のするときには、メソディストのチャペルへ行く」(34) ことによって、同じように宗派的二項対立を脱構築する。語り手も、王様の忠実な手下の行動を「メソディストのように」と形容することによって、権力とその反対派との二項対立の脱構築に荷担してしまう。かくして、「困惑する牧師」では dissent の意味は極めて曖昧になる。二項対立を意識しながら、それが無効化されて「困惑する」メソディスト派の牧師を描いて、「困惑する牧師」は秀逸である。

メソディストを「メソディ」と蔑称で呼んだのは、英国国教会内にとどまったエヴエンジェリカルたちである。そのエヴアンジェリカルたちは、「チャーチ・メソディスト」という、これまた蔑称で呼ばれていた。近親憎悪というべきか、メソディストとエヴアンジェリカルは近縁であった<sup>(5)</sup>。メソディストやエヴアンジェリカルは神と人 (自分) とが一対一で向き合うこと、霊的

経験を重視することを重視したが、もうひとつ重視したものがあった。それは回心である。回心は、『オックスフォード英語辞典』によれば、「罪人を神の方へ向き直らせること。罪深いこと、不信心、世俗的なことから神の愛と信仰の追求への精神的な変化」という意味になる。

エヴァンジェリカリズムは洗礼や堅信礼 (confirmation) を受けても、一度は回心しなければならないと教えている。回心によって「一度生まれ変わる」というのがエヴァンジェリカリズムの思想である。これを過去の(原罪を身にまとして生まれた)自分を現在から切り離すと言い換えることができる。また、祭祀を執り行う者(カソリックの神父の役割)の介在なく神と一対一で向き合うことも重視した。教会での儀式よりも聖書を読むことを重視したのである。罪深い自分というアイデンティティと向き合っ、神との個人的な関係を確立した。そのため教会という集団的な権威を必要としなかった。

回心体験を信仰の中心に位置づけるメソディズムやエヴァンジェリカリズムから派生した宗派は、それぞれ独自に回心体験を集めた雑誌を出版していたが、それに掲載される「回心体験はいやましにステレオタイプ化していく傾向があった」という指摘がある(Watts 51)。雑誌で読んだ回心体験を自分のものとしてまた雑誌に投稿するということもあったであろうことを、この「ステレオタイプ化」は示唆している。また、メソディストは悪魔が人間の姿をして現れるという言い方で、子供時代から原罪意識を植え付けられていたそうだから(Mack 65)、この共通体験が記憶の回路に組み込まれて、同じような回心体験につながったのだと考えることもできる。別の研究者によれば、回心体験の持ち主には一定の共通項を見いだせるそうである。そのひとつとして回心は十代で起きることが多い(Hempton 63)というのは、精神的に不安定な時期であることと無関係でないだろう。深い孤独感も多くに共通しているという研究もある(Mack 75)。メソディスト派の特徴である野外集会や伝道集会で連鎖的に起きることがあったというから、回心がマスヒステリアの所産と考えるのめ的外れではあるまい。

実際、メソディスト派のチャペルや野外集会では、「予言や夢やトランス状態や幻覚が頻繁に起こった」(Griesinger 83) そうだ。グリーンシンガーによれ

ばジョン・ウェズレーも超自然的な現象をしばしば経験したそうで、教会制度の革新も彼の霊的经验が直接の原因となっているという。チャドウィックによれば、ウェズレーの始めた回心の有効性（効き目）や方法や性質については、彼が生きている時代に既に論争的になっており、死後もずっと疑われていたそうである（1, 5）。

メソディストやエヴァンジェリカルは、闇から光へと瞬間的に転向する回心体験を重視したが、その一方で、ゆっくりと穏やかなプロセスを経て精神的な光明へと到達した多くのキリスト教徒たちの経験を全く無視した。その点にハーディも批判の目を向けていた。

## II

回心の瞬間といい、精神的な覚醒といい、それらはひとりの人間の全生涯に匹敵するような短いながらも濃密な体験で、それを経験した人の世界観を一変させる重要な契機となり得るが、このような種類の回心をハーディは評価していなかったようだ。しかし、穏やかで緩やかな回心を彼は肯定的に描く。その例を『帰郷』に見いだすことができる。シャドウオーターの洪水の場面は、彼が19世紀のイギリス小説の伝統を踏襲して、水を精神の再生を象徴するシンボル（Buckley 100-04）として使っていることを示している。この場面でハーディは、クリムをキリストによって死から復活したラザロ（「ヨハネによる福音書」12. 38-）に例えること（380）によって彼の「復活」を暗示している（トマシンがベタニヤのマリアに例えられる）。復活の後にクリムには回心が訪れるが、それは穏やかで緩やかだった。11月5日の悲劇から一年たち、それから半年たった「夏のそよ風の吹く」日（411）にクリムはメソディスト派の巡回宣教師として黒塚で説教をする。

クリムの回心とは全く対照的に、『テス』に描かれるアレック・ダーバヴィルの回心は激しく、瞬間的なものだったという点で、メソディストの一般的な回心と同じである。アレックの回心の重要性は、テスのピュリティ（純潔/潔白）と密接につながっていることにある。いや、回心の文脈に置くと、テスの



ピュリティの読み直しが可能であると言ってもよい<sup>(6)</sup>。アレックと偶然出会ったテスに、彼は「覚醒の日がやってきたんだ」(Tess 293)と自分の回心を告げる。彼は自分の罪深い過去を断ち切って生まれ変わったと考えているのである。エヴァンジェリカリズムの回心というのはまさに罪深い過去の自分との縁切りということで、アレックは conversionist (160)と呼ばれたクレア師によって過去の放蕩、墮落の生活から足を洗ったのである。エヴァンジェリカルやメソディストならば罪人アレックが救済への道をたどり始めたと考えるであろう。

アレックの回心はテスを皮肉なディレンマに陥らせる。テスと再会して、彼の言葉に拠れば「テスに誘惑されて」、「宗教の回路はたちまち干上がってしまった」(Tess 318)。この後すぐにアレックはもとの放埒なアレックに逆戻りしてしまう。これはメソディストの主張する回心に疑問を投げかけるエピソードになっている。回心は、神との出会いを分水嶺として、過去の自分と現在の自分との不連続をその本質とする。つまり、回心は人の一生という連続した時間にくさびを打ち込む。過去と現在に断裂をもたらすわけで、そういう奇跡が実際に起こるならば、テスにとってもそれは「福音」だろう。しかし、アレックの回心が回心と見えて、実は回心ではなかったことは、断裂したように思われても、実際には過去と現在は連続しているのではないか、という彼女の疑念を補強する—「以前の存在と現在の存在との連続性の断絶は彼女がずっと願っていたものだったが、結局起こらなかったのだ。過去の出来事は完全な過去の出来事にはならないのだ、彼女自身が過去の存在になるまでは。」(Tess 298-9)。願望(時間の不連続)と恐れ(時間の連続)の狭間にあって苦悩するテスの心理はここでの的確に表現される。彼女とアレックの時間の連続性の意識はシンクロナイズし(同時性を持って)、皮肉な重なり方をするのである。テスのよく知られた、「一度犠牲になったら、その後ずっと犠牲になってしまう、それが定め(“Once victim, always victim.”)」(Tess 321)という、時間の連続性を示唆する言葉は、カルビニストとエヴァンジェリカルの間に位置するアルミニアン(アルミニウス派)の雑誌に掲載された回心体験中の「一度恩寵にあずかれば、その後もずっと恩寵にあずかることができるのです(“Once in

grace always in grace.”)」(qtd. in Hindmarsh 244)と皮肉だが、見事に響き合う。

ハーディはいくつかの作品で主人公の回心を描いている。『はるか狂乱の群れを離れて』ではバスシバの、『帰郷』ではクリムの、『森に住む人々』ではフィッツピアーズの、『テス』ではアレックとエンジェルスの、『日陰者ジュード』ではシュアの回心を描いている。どれにも共通するのは母親や配偶者や親しい友をなくすという経験が回心のきっかけとなっていることだ。しかし、これらの「回心文学」でハーディはよい回心と悪い回心を描き分けていることに注目したい。『日陰者ジュード』で描かれるシュアの回心は、詩人で、予言者でダイヤモンドのように輝く心を持っていると讃えられた(369; J. S. ミルがハリエットを讃えた言葉を想起させる)女を、何歳も老けてすっかりやつれた(431)狂信者に変えてしまう。「よい」回心は自己再生につながるが、「悪い」回心のもたらすのは精神と肉体の破滅でしかないということを、シュアの「回心」によってハーディは描いたのである。よい回心はゆっくりと穏やかなプロセスを経て、再生へとつながり、悪い回心は激しく、瞬間的なもので、その先に待つのは自己の破滅である。それは周りの誰も幸せにしない回心でもある。

### III

エイミー・クルーズが「小説が読まれ始めると、聖書は読まれなくなる(“Where novel-reading comes in, Bible-reading goes out.”)」(67)という言い方で1830年代以降の小説の時代にキリスト教がどのような位置を占めたかを簡潔にまとめている。非国教会の多くで、小説と聖書はお互いに排斥し合う存在であった。エヴァンジェリカルはその例で、エヴァンジェリカルの著名な社会活動家で奴隷廃止論者であった作家 Hannah More は小説を「最も普遍的で、最も有害な精神的腐敗の原因」(207)だと見なしていたそうである<sup>(7)</sup>。

エヴァンジェリカルとメソディストの「祖先」であるピューリタンは、想像力という世俗性の強い刺激物を拒絶していたが、その理由は、回心者の想像力や五感はずべて神に捧げるべきだという神学上の信念に基づいていたという

(Cunningham 49)。想像力の重要性という点では、ハーディはメソディストやエヴァンジェリカルの対極にあった。再び『帰郷』のクリムの「回心」に戻ろう。彼が精神的な再生を遂げる契機は過去との邂逅である――

He frequently walked the heath alone, when the past seized upon him with its shadowy hand, and held him there to listen to its tale. *His imagination* would then people the spot with its ancient inhabitants — forgotten Celtic tribes trod their tracks about him, and he could almost live among them, look in their faces, and see them standing beside the barrows which swelled around, untouched and perfect as at the time of their erection.

(*Return of the Native* 387; emphasis added)

この場面はクリムの特異な想像力を描いている。彼の想像力は過去へと飛翔し、ケルトの人々の中に自分の心地よい居場所を発見するのである。進歩主義者の孤独と疎外が過去の人々との接触によって癒されるという皮肉を、この場面に読みとる読者もいるかもしれないが、それはハーディがここで言わんとすることではないだろう。

母親と妻を相次いで失うという悲劇を経験して、精神的な危機にあった彼を絶望の淵から救ったのはヒースのゆっくりした時間の流れであった。そのヒースのそこここに太古の昔に生き、そして滅び去った先住民の記録をクリムは見いだす――

Their records had perished long ago by the plough, while the works of these remained. Yet they all had lived and died unconscious of the different fates awaiting their relics. It reminded him that unforeseen factors operate in the evolution of immortality. (387)

ここに描かれるのは、クリムの現実への洞察力の獲得と、自分自身の過去との

決別であるが、これらは過去の人々との一体化によって可能になる。つまりは、『帰郷』は洪水体験に加えて、エグドンでの過去との連帯をクリムの再生の契機として描いているわけである。過去が未来を胚胎するという奇妙であるが、ハーディの読者がしばしば出会うレトリックをここに見ることができる。上の引用の最後の行「不滅のものの発展進化するときには目に見えぬ何か働いているのだ」という箇所は『テス』の刹那的な回心と対照的な、緩やかで穏やかな動きが存在すること、そしてそれが不滅に向かっていることを暗示している。ゆっくりとした回心がクリムの再生につながったのである。

クリムがエグドンで「太古の住民たち」を見たというのはリアリズム小説ではあり得ない設定である。しかし、「過去がクリムをその陰のような手で捕らえた」という部分や、「彼の想像力はその場所を太古の住人たちでいっぱいにした」という箇所に見られるような特異な想像力を持った登場人物がハーディの詩や小説に頻繁に描かれる。彼らには特定の場所がある想像を生み出す、いわば過去を映し出すスクリーンとして機能するのである。そしてその媒体となるのが石であることが多い。「時が手を触れて古びた石の中に何が見えるのか、/その中には何もないのに」で始まる「大英博物館にて（“In the British Museum”）」という詩はその典型。

— “I know no art, and I only view  
A stone from a wall,  
But I am thinking that stone has echoed  
The voice of Paul,  
  
“Paul as he stood and preached beside it  
Facing the crowd,  
A small gaunt figure with wasted features,  
Calling out loud  
[...].

(13-20)

ここには一個の石を媒体に時間の境界を飛び越えて、語り手の想像力が過去へと広がっていく様子が描かれる。語り手の想像力が小さな石をスクリーンにしてその上に過去の情景を描いていることに注目したい。このような心理を逆行認知（retrocognition）と言う。過去のひとの特定の経験が充電された場所は、後の時代にそこに住むひとや訪問者にある心象を伝播するのである。この詩の場合には石が語り手の住む現在とパウロが布教をしていた過去を結びつけること、つまり、「リールのバイオリン弾き（“The Fiddler of the Reels”）」の表現を使えば、「古代と現代が突然完全な接触をすること」（137）を可能にするのである。

ハーディの連想は、外界の現象に触発された知覚の活発な活動を必要とする。このような連想の働きを扱った詩には、「ローマ人の造った道（“The roman Road”）」、「最後の街灯を越えたところ（“Beyond the Last Lamp”）」、「古い家具（“Old Furniture”）」、「岩に射す影（“The Shadow on the Stone”）」、「ロマンティックな日の後で（“After a Romantic Day”）」などがある。（タイトルに語り手の連想の触媒であると同時に現在と過去をつなぐ軸となった「物」一道、街灯、家具、岩一が含まれていることに注意されたい。）いずれの詩も連想の助けがあれば、空想が時間と空間の秩序から抜け出して、日常的で散文的な世界にも詩的な情景を発見しようということを示している。注目すべきは、ハーディの作品に登場する人物なら誰でも土地に充電された過去の記憶を見ることができるとは限らぬことだろう。では、どういう種類の人にそれが可能なのだろうか。「物言わぬ家」（“The House of Silence”）では、ある家に亡霊が棲みついていると主張する男に、子供が「その亡霊がなぜ自分に見えないのか、」と尋ねる。男は次のように答える—

“—Ah, that’s because you do not bear

The visioning powers of souls who dare

To pierce the material screen.”

(10-12)

「魂を思い描く力（visioning powers of souls）」を備えたものだけが物質的で

きたスクリーンの向こう側にある精神世界をのぞくことができるという、現実世界では極めて特異な現象は、しかし、ハーディの作品では決して珍しいものではない。

どうやらハーディ自身もこの「魂を思い描く力」を備えていたようである。彼が1906年におこなった「教会復興の思い出 (“Memories of Church Restoration”)」という講演の中で、彼自身も若い頃に携わった教会復興を批判し、なぜ自分は古い建物（特にゴシック大聖堂）を評価するかを次のように説明している—

The renewed stones at Hereford, Peterborough, Salisbury, St. Albans, Wells, and so many other places, are not the stones that witnessed the scenes in English Chronicle associated with those piles. (Millgate 215)

この引用文に見られるハーディの石に対する偏執狂的なこだわりは注目してよい。彼は石を歴史の目撃者と考えていて、そこを訪れる人たちはその石のもたらす連想によって過去の歴史に思いを馳せることが可能だと主張しているのである。この講演の少し前の部分で、古い建築物の魅力は「多くの世代の人々に見られたり足を踏み入れられたり」したことにあるとも言っている。そして建築物が建て替えられると、「連想という感情」がダメージを受けるのだという(215)。1910年に行った講演でも、ドーチェスターのオール・セイントズ教会を壊したことを、「どのような理由で石の中にある500年の記録を破壊したのか」(F. E. Hardy 352)と批判している。このように、ハーディは連想の重要性を強調し、石は歴史の証人であるという主張を繰り返しているのである。

逆行認知はハーディの詩的想像力の源泉と言ってよいもので、彼の代表作である「1912-13年詩集 (“Poems of 1912-13”)」は、エマの足跡の印された特定の土地から靈感を得て書かれたものである。例えばその中に含まれる「カースル・ボテレルで (“At Castle Boterel”)」—

I look behind at the fading byway,  
 And see on its slope, now glistening wet,  
 Distinctly yet  
 Myself and a girlish form benighted  
 In dry March weather. (3-7)

夕暮れの中で濡れそばつ眼前の坂道は、よく晴れて明るい3月のあの日の（もちろん今よりも遙かに若い）自分とエマを映しだす。現在と過去、雨の夕暮れと明るく晴れた日—この時間と情景の見事な対比は、そのまま現在と過去を峻別する語り手の異なった感情の隠喩として機能している。ハーディの好きな黄昏時の出来事を描くこの詩の想像力の媒体となっているのは石ではなく坂道であるが、それをスクリーンとして、その上に行き暮れた若き日の自分とエマの姿をハーディは見ている。移ろいやすい記憶を詩というキャンバスに記録することは、ハーディにあってはやはり石の助けによって容易になりえた。上の引用に続く連にそれが出てくる—

Primaeval rocks form the road's steep border,  
 And much have they faced there, first and last,  
 Of the transitory in Earth's long order;  
 But what they record in colour and cast  
 Is — that we two passed. (21-25)

物理的にも巨大な岩は、イメージとしても、また詩人の詩的想像力の源としても大きな存在であることをこれらの行は明らかにしている。「太古そのままの岩」は大地の悠久の秩序を象徴し、それと時の流れの中でたゆたう君と我との違いを表して非凡である。ハーディに詩的な靈感を与えるのは、美しい風景でなくてもよい。「草木も生えていない、急坂の、ごつごつと荒々しい、/月の光に照らされた切り通しでさえ、/場所の詩には申し分なし」（“After a Romantic Day” 9-11）であるから。ハーディの「場所の詩（poetry of place）」にあ

っては、その土地固有の記憶と結合することによって、本来無機質である風景が、J. ヒリス・ミラーの言葉を借りれば、「人間的に意味のある空間」(21)になる。

ハーディの石に対する特殊な感性が彼の父親の職業が石工であったことと幾らかは関わっているのであろうが、それだけでは彼の熱狂は説明できない。石工の息子で石が好きになる者もいるだろうが、「お父さんは石工だったから、もう石はうんざり」という息子もいないとは限らない。それはともかく、『ハーディ伝』には彼の石に対する偏執狂的な関心を示す記事がいくつか収められている。1887年のイタリア旅行で訪れたヴェネチアのサン・マルコ寺院についての記事はその一つ――

That floor, of every colour and rich device, is worn into undulations by the infinite multitudes of feet that have trodden it, and *what* feet there have been among the rest! (F. E. Hardy 193; Hardy's emphasis)

この中世都市でもハーディの関心は石に向けられている。彼にとって古いということとは単に長い時間を経過したということではなく、何世代もの人たちに眺められ、触れられ、靴で踏まれるという、きわめて物理的な証拠を必要とした。そしてその物理的な証拠は石にこそ認められるというわけである。

ヴェネチアの数日前に滞在したローマでも、過去の時間を物質として感覚的に認識するという経験が記録されている――「ローマの計り知れぬほどのたくさん人の歴史の層が彼の上に物理的な重さのように積み重なっているように感じると彼は頻繁に口にした」(F. E. Hardy 188)。イタリアは石の国である。ほとんどすべての石に歴史が宿っているように彼には思われた。その石を媒介として、彼の想像力は過去へ頻繁に飛翔し、それによって悩まされることもあった。例えば、アッピア街道では、「疲労困憊、ローマへ向かってとぼとぼと歩く鎖でつながれた囚人たちの列の幻影に取り憑かれ悩まされた」(F. E. Hardy 189)という経験を記録する。アッピア街道は石の舗道である。その舗道は馬車(戦車かも)のわだちが深くくぼんでいる。ハーディはそこに歴史の重みを



感じ、それを媒介として幻影を見たのである。

このように、ハーディの作品中には想像力や連想や逆行認知に特に優れた人たちが棲んでいて、そういう特異な感応力を持つ人たちを作り出したハーディ自身も同じ能力の持ち主だった。そういうハーディだから、想像力を神に捧げてしまって、それを活用して現実の向こう側にまで目を向けようとしめないメソディストを評価することはなかったのではないか。密輸したラム酒の樽を見たときのストックデールについての「その光景はそのような物がそこにあるという事実以外の何も示していなかった」(39)という描写も彼の想像力の欠如を示唆しているようだ<sup>(8)</sup>。彼を評して語り手は、「正直で世間ずれしていない(honest and unsophisticated)」(41)と言っているが、これは何事も顔面通り受け取り、想像力を働かせることができない性格と言い換え可能である。そういう点ではストックデールはメソディストにふさわしい。

\* \* \* \* \*

「困惑した牧師」の最後のページで、リジーの回心が述べられる。それは穏やかでゆっくりした、「正しい」回心であった――

“I own that we were wrong,” said she. “But I have suffered for it. I am very poor now, and my mother has been dead these twelve months .... But won’t you come in, Mr. Stockdale?” (“The Distracted Preacher” 89)

「正しい」回心は穏やかでゆっくりと訪れる。リジーの回心も母親の死が契機となっている点が、ハーディの他の回心と軌を一にしている。違うところは回心が同時に改心でもあったという点だろうか。

ハーディが巻末に付けた注では、この結末は読者におもねるもので彼の意図ではなかった<sup>(9)</sup>。本来の結末では、リジーとその従兄で連れ合いのアウレットはウィスコンシンへ移民して、そこで開拓者として暮らすことになっていた。そのプロットでは、リジーもアウレットもイギリスへは戻らない。野心の成就が植民地でなされ、その成果を持って帰国するという成功のパターン（同時に、ヴィクトリア朝小説のコンペンションのひとつ「帰還」のパターン）やハッピー

ーエンディングから逸脱したプロットが作者自身の意図だとハーディが注で書いていることに注目したい。「あなたは国教に反対（ディセント）し、私は王様に反対（ディセント）しているの」とヒロインに語らせたハーディも、コンベンションにディセントしたのである。

国教に背いたヒロインは、その結末では国境をも越えてしまうわけだが、そもそもこのテキストでは境界線は常に曖昧であった。体系化され分節化されて、了解事項となっていた意味を「困惑した牧師」というテキストは次々と無意味化し、伝統的な概念を次々と破壊し、無効化していく。「不法な取引 (illicit trading)」が「一種の罪 (a sort of sin)」と言い換えられたり (39)、密輸品のジンやブランデーを入れた小さな樽が密輸に携わる村人たちによって「蕪 (turnip)」という隠語で呼ばれたりするのは (39)、ひとつの言葉が意味の境界線を超えて別の意味を持ち始める例に挙げられるだろう。言語の体系や秩序はここではころび、混乱する。いっぽうで、それを額面通りに（言い換えれば、言葉と物の対応は1対1であると）受け取る「正直で世間ずれしていない」ストックデールの困惑する、おかしさがこの中短編の特徴である。

ジェンダーの空間も混乱している。リジーは密貿易のために夜出歩くとき亡夫の外套を身につけて男に変装するし (56)、密貿易取締官が持ち去ったラム酒の樽を取り返すべく、村人たちは女に変装して襲撃する (82)。ジェンダーの対称性を象徴する服装がここでは脱構築されて、ジェンダーの非対称性が暗示されている。権威と権力を後ろ盾にしているラティマーさえもこのテキストでは、共犯者として記号を攪乱させる。彼は白馬に乗って捜査をするが、彼の白い愛馬についてリジーは、「ああいう職業の人間が一番選びそうにない色」 (68) と揶揄している。密貿易取締官は（特に密輸に関わっている人たちから）地味で目立ちにくいという了解事項はネザー・モイトンでは必然ではない。ラティマーと彼の愛馬の関係は、シニフィエとシニフィアンに対応が断絶して記号が混乱しているこのテキストにふさわしい。

いや、ストックデールのアイデンティティも限りなく曖昧になっていく。ラティマーとその手下に追い詰められて、村人は教会の塔に隠れる。そこへ現れたストックデールに驚いて村人のひとりが言うー

“What, be you really one of us?” said the miller.

“It seems so,” said Stockdele sadly.

“He’s not,” said Lizzy, who overheard. “He’s neither for nor against us. He’ll do us no harm.” (74)

「そうかもしれない」と悲しげに口にするストックデールは、自分のアイデンティティの不安に直面して困惑している。彼のアイデンティティは曖昧になって、王様の側かそれとも反対側か、ディセントかそうでないのか、密貿易の一味かそうでないのか、ということが不明になる。それはちょうどヴィクトリア朝の宗教地図中でメソディストの占める位置に似ているが、この類似はハーディの意図したところではないだろう。とまれ、「困惑する牧師」を読むと、ハーディ自身も逸脱者であり脱 <sup>ディセンター</sup> 構 <sup>ディコンストラクショニスト</sup> 築者なのだと思わざるを得ない。そういう姿勢は方法や体系を重視するメソディズムと相容れるものではなかった。

#### Notes

- (1) 本稿は日本英文学会関西支部第11回大会（2016年12月17日、神戸市外国語大学）で口頭発表した原稿に加筆と修正をほどこしたものである。
- (2) 1851年の国勢調査によると国教会47.4%、メソディスト25.7%（Horace Mann の分析による）であった。国教会の信徒に占めるエヴァンジェリカル割合は地域差がある。ヨークシャーでは40%を上回り、ダービーシャーやランカシャーでは25%前後であった（Bebbingon 109）。
- (3) ハーディとキリスト教についての研究は決して少なくないが、そのほとんどがハーディのキリスト教的伝記研究である。ハーディ研究者を魅了してやまなかったのが、聖職者を目指していた彼がダーウィンの進化論に触れて、キリスト教に疑問を抱き、無神論者に至る過程である。そのような伝記的研究には以下のものがある。Timothy Hands, *Thomas Hardy: Distracted Preacher?*、Deborah Collins, *Thomas Hardy and His God*、Jan Jędrzejewski, *Thomas Hardy and the Church*。ハーディとメソディズムに焦点を当てた研究は、残念ながらこれまでなかった。

(4)

THOMAS HARDY

be supposed to be secreted in at that very moment, pending their removal on the following night. Among the places tested and examined were:

Hollow trees	Cupboards	Culverts
Potato-grounds	Clock-cases	Hedgerows
Fuel-houses	Chimney-flues	Faggot-ricks
Bed-rooms	Rainwater-baths	Haystacks
Apple-teds	Pigeons	Coppens and ovens.

After breakfast they recommenced with renewed vigour, taking a new line; that is to say, directing their attention to clothes that might be supposed to have come in contact with the tubs in their removal from the shore, such garments being usually tainted with the spirit, owing to its oozing between the staves. They now sniffed at—

Smock-folds	Stitch's and down-dress' aprons
Old shirts and waistcoats	Knave-saps and belting-gloves
Coats and hats	Tarpannies
Breeches and leggings	Market-socks
Women's slacks and gowns	Scattercoats

And, as soon as the mid-day meal was over, they pushed their search into places where the spirits might have been thrown away in alarm:

Horse-ponds	Manses	Sinks in yards
Stable-drains	Wet ditches	Road-scrappings, and
Cinder-heaps	Cesspools	Back-door gutters.

But still these indefatigable exchimers discovered nothing more than the original tell-tale smell in the road opposite Lizzy's house, which even yet had not passed off.

'I'll tell ye what it is, men,' said Latimer, about three o'clock in the afternoon, 'we must begin over again. Find them tubs I will.'

The men, who had been hired for the day, looked at their hands and knees, mudily with creeping on all fours so frequently, and rubbed their noses, as if they had almost had enough of it; for the quantity of bad air which had passed into each one's nostril had rendered it nearly as insupportable as a flue. However, after a moment's hesitation, they

72

(5) エヴァンジェリカリズムは18世紀にメソディズムが国教会内で改革派として勃興したときにその対抗勢力として始まったという歴史を持つ。ところがメソディズムの創始者のウェズレーの意図に反してメソディストは国教会の外に出て、一方でエヴァンジェリカルは其中で活動が続ける。エヴァンジェリカルズは church methodists と呼ばれるが、そのような「コウモリ的（ほ乳類と鳥類の特徴を併せ持った）な」、中途半端な姿勢を揶揄する High Church からの批判的呼称である。そういう経緯から、メソディストは英国国教会の外に出た現在でも『一般祈禱書』を用いている。エヴァンジェリカル（低教会派、福音主義者）であるエンジェル之父親によって、回心したアレックがメソディスト派の牧師（この場合は a lay preacher。メソディストは平信徒も布教や説教を許されていた。1803年までは女性も説教師として活動した。）となるのは、だから、決して不自然ではない。低教会派とは対照的に、キリスト教の教義、特に聖書の記述を杓子定規に受け取らない人たちもいて、「広教会（Broad Church）」派と呼ばれた。こちらは特定のグループを指すのではなく、聖書を自由に、科学的に解釈しようという人たちを指して言う。

(6) すべてのエヴァンジェリカルは family piety と moral purity の重要性を教えられて育った（Gilmour 74）。そういう育ちの典型であるエンジェルは、その両方の正当性を疑わなければならない状況にしばしば直面する。エヴァンジェリカリズム批判の文脈にテスの「純潔」を置くと、『テス』の読み直しができるだろう。

(7) ハンナ・モア（1745-1833）は詩人にして作家、教育者。多くの分野で活躍した。エヴァンジェリカルに属するクラバム・セクトのメンバー。このメンバーの

中心には William Wilberforth がいた。モアは多才であったが小説は残さなかった。これとは対照的に、エヴァンジェリカルと対立した高教会のメンバーには Charlotte Yonge や Mrs. Oliphant のように、多作であるばかりか、20世紀に入っても読まれ続けた優れた作家が含まれる。ヤングは150以上、オリファントは120を超える作品を残した。そのほとんどが小説である。

- (8) 親切心を持ちながらも思いやりという想像力を欠くために、周りの人たちを戸惑わせ、困らせる人の例に、エンジェル・クレアの両親を含めることは間違っていないだろう。テスがエンジェルに託したブラック・プディングと蜂蜜酒を巡るエピソード (163-4) や、どのような女性がエンジェルの妻としてふさわしいかと母親が意見を開陳する場面 (165) は、エヴァンジェリカルが善意の人であっても想像力を欠くゆえに思いやりを欠くのだということをハーディが見逃してはいないことの証拠である。エンジェルはそれを「彼の両親は行い (practice) では正しいが、感情 (sentiment) では間違っている」(164) と的確に指摘している。エヴァンジェリカルの牧師は、「行儀作法と行動 (conduct) において厳粛」であったそうだし、エヴァンジェリカルは女性の役割を厳しく限定していたという (Englander 20)。エンジェルの両親の言動はまるで戯画のようにこれにぴったり当てはまる。

エヴァンジェリカルのこのような性向を過剰に持つのがコリンズの『月の石』の語り手のひとりクラック嬢である。彼女は一日の最後に「夕べの祈り (Evening Hymn)」をベッドで唱えると書かれているが (191)、これは彼女がエヴァンジェリカルの勤めを methodically におこなっていることを示している。彼女は叔母のヴェリンダー夫人の世話をしながら、夫人の家のあちこちに、『ジェイン・アン・スタンパー嬢の生涯と書簡と奉仕 (*Life, Letters, and Labours of Miss Jane Stamper*)』のような小冊子 (tract) を置いて、不信心な叔母を evangelize しようとする (253)。これはエヴァンジェリカルの「小冊子 (Tract books)」のひとつで、「宗教小冊子協会 (Religious Tract Society)」が発行した。協会の設立は1799年と早い。1860年代にエヴァンジェリカルが批判してやまなかったセンセーション小説に倣って、女性と子供向けの小説を出版し始めた。メソディストの小説家がほとんどいないのに対して、エヴァンジェリカルの作家は数が多く、その作品の質が低いのはこの時期にトラクトの作者として粗製濫造されたからでもある。『スタンパー嬢の生涯と書簡と奉仕』にわざわざ44版と付けているのは、文学にはほど遠い質の読み物を喜んで読んだ、その読者 (エヴァンジェリカル) に対するコリンズの皮肉である。トラクトのベストセラーの嚆矢となったのが Sarah Smith (1832-1911) の『ジェシカの初めてのお祈り (*Jessica's First Prayer*)』(1867) であるが、この子供向けの短編小説はセンセーション小説を真似たプロットに特徴がある。150万部以上が売れ、ヨー

ロッパのすべての言語と多くのアジア、アフリカの言語に翻訳されるほどよく読まれたという。センセーション小説のプロットに倣った小冊子をヴェリンダー夫人の家のあちこちに置くクラック嬢を描いたセンセーション作家コリンズは、皮肉に自己言及したのであろう。

- (9) ハーディは “de rigueur” と書いている。このフランス語は「礼式 [流儀] に従って、礼儀上必要で (ある)」(『新英和大辞典』) の意味。「実際には、リジーはストックデールと結婚しないで、筆者の見るところ、とても感心なことに、密貿易人ジム (アウレット) と一緒にいて、二人は結婚してから移民をした。これはアウレットの冒険を好む先祖たちによって強いられたといってよいような国外移住の方法であった」(367) とハーディは注に書いている。アウレット (Owlett) という名前は “owler” から来ているようだ。『新英和大辞典』は「(昔)羊毛または羊を英国外へ密売した人、密輸出商 (smuggler); その密輸船」と定義している。

#### Works Cited

- Bebbington, David W. *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s*. 1998, Routledge: London, 2009. Print.
- The Bible. Authorized King James Version. Ed. Robert Carroll, Stephen Pricket. Oxford: Oxford UP, 1997. Print.
- The Book of Common Prayer*. <http://justus.anglican.org/resources/bcp/eng-land.htm>. Web. 20 Nov. 2016.
- The Book of Common Prayer and Administration of the Sacraments and Other Rites and Ceremonies of the Church*. New York: Oxford UP, 1990. Print.
- Buckley, Jerome Hamilton. *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding*. Cambridge, Mass: Harvard UP, 1980. Print.
- Chadwick, Owen. *The Victorian Church, Part One: 1829-1859*. 1966. London: SCM, 1971. Print.
- . *The Victorian Church, Part Two: 1860-1901*. 1970. London: SCM, 1972. Print.
- Chapman, Raymond. *The Victorian Debate: English Literature and Society, 1832-1901*. Basic Books: New York, 1968. Print.
- Collins, Deborah L. *Thomas Hardy and His Gog: A Liturgy of Unbelief*. London: Macmillan, 1990. Print.
- Collins, Wilkie. *The Moonstone*. Ed. and introd. John Sutherland. Oxford:

- Oxford UP, 1999. Print.
- Cruise, Amy. *The Victorian and their Books*. 1935. Allen and Unwin, 1962. Print.
- Cunningham, Valentine. *Everywhere Spoken Against: Dissent in the Victorian Novel*. 1975. Oxford: Clarendon P, 1977. Print.
- Englander, David. "The Word and the World: Evangelicalism in the Victorian City." *Religion in Victorian Britain: II Controversies*. Ed. Gerald Parsons. Manchester: Manchester UP, 1988. 1-41. Print.
- "General Background to 1851 Religious Census."  
[http://www.isle-of-man.com/manxnotebook/methdism/rc1851/rc\\_gb.htm](http://www.isle-of-man.com/manxnotebook/methdism/rc1851/rc_gb.htm).  
 Web. June, 28, 2017.
- Gilmour, Robin. *The Victorian Period: The Intellectual and Cultural Context of English Literature, 1830-1890*. Routledge: London, 1998. Print.
- Griesinger, Emily. "Charlotte Brontë's Religion: faith, feminism, and *Jane Eyre*." *Christianity and Literature*. 58: 1 (Autumn 2008): 78-102. Print.
- Hands, Timothy. *Thomas Hardy: Distracted Preacher? Hardy's Religious Biography and Its Influence on His Novels*. London: Macmillan, 1989. Print.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy, 1840-1928*. 1962. London: Macmillan, 1975. Print.
- Hardy, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Hardy*. Ed. James Gibson. New York: Macmillan, 1976. Print.
- . "The Distracted Preacher." *"The Withered Arm" and Other Stories, 1874-1888*. Ed. Kristin Bardy. London: Penguin, 1999. 34-89. Print.
- . "The Fiddler of the Reels." *"Life's Little Ironies" and "A Changed Man."* Ed. F. B. Pinion. London: Macmillan, 1977. 123-38. Print.
- . *Jude the Obscure*. Ed. and Introd. Patricia Ingham. Oxford: Oxford UP, 1985. Print.
- . "Memories of Church Restoration." *Thomas Hardy's Public Voice: The Essays, Speeches, and Miscellaneous Prose*. Ed. Michael Millgate. Oxford: Clarendon P, 2001. 239-53. Print.
- . *The Return of the Native*. Ed. and introd. Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 1990. Print.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. Ed. Juliet Grindle and Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 1988. Print.

- Hefling, Charles, and Cynthia Shattuck (eds.). *The Oxford Guide to the Book of Common Prayer: A Worldwide Survey*. Oxford: Oxford UP, 2006. Print.
- Heitzenrater, Richard P. *Wesley and the People Called Methodists*. Nashville, TN: Abingdon, 1995. Print.
- Hempton, David. *Methodism: Empire of the Spirit*. New Haven: Yale UP, 2005. Print.
- Hindmarsh, D. Bruce. *The Evangelical Conversion Narrative: Spiritual Autobiography in Early Modern England*. 2005. Oxford: Oxford UP, 2007. Print.
- Jędrzejewski, Jan. *Thomas Hardy and the Church*. Houndmills: Macmillan, 1996. Print.
- Knight, Frances. “‘Male and female He Created Them’: Men, Women and the Question of Gender.” *Religion in Victorian Britain*, Vol. 5. Ed. John Wolffe. Manchester: Manchester UP, 1997. 24–57. Print.
- Mack, Phillis. *Heart Religion in the British Enlightenment: Gender and Emotion in Early Methodism*. Cambridge: Cambridge UP, 2008. Print.
- Mawby, Coly. “Hymns,” *Music for Church Choirs*.  
<http://www.music-for-church-choirs.com/page-hymns-92.html>. Web. 20 Nov. 2016.
- Miller, J. Hillis. *Topographies*. Stanford: Stanford UP, 1995. Print.
- “More, Hannah.” *The Abolition Project*. [http://abolition.e2bn.org/people\\_60.html](http://abolition.e2bn.org/people_60.html). Web. 27, June, 2017.
- “Retrocognition,” *Occultpedia*. <http://www.occultopedia.com/r/retrocognition.htm>. Web. 18 Nov. 2016.
- Truman, Myron C. “‘Irritant Poison’: Idealism and Scientific History in Late — Victorian England.” *Studies in Romanticism* 22 (Fall 1983): 407–19. Print.
- Tucker, Karen B. “The Prayer Book and Other Traditions: John Wesley and the Methodists.” *The Oxford Guide to the Book of Common Prayer: A Worldwide Survey*. 208–13. Print.
- Wolff, Robert Lee. *Gains and Losses: Novels of Faith and Doubt in Victorian England*. New York: Garland, 1977. Print.